

- ◆フィリップ・バヨン 1947年生まれ。ポーランドの小説家、脚本家、映画・劇の監督。映画芸術の教授、映画制作スタジオ「カドル」所長。数十本の映画や劇を演出し、プラチナ・ライオン功労章やポーランド復興勲章を含む約30の賞を受賞
- ◆マジェナ・ムルズ=バヨン ジャーナリスト、旅行家、写真家。雑誌「ビジネストラベラー」編集長。私生活ではバヨン監督の妻
- ◆ウカシュ・グット 1980年生まれ。ポーランドの映画監督・撮影監督。グディニア・ポーランド映画祭のゴールド・ライオン大賞およびポーランド映画賞を受賞。彼の映画「Broad Peak」は日本のNetflixで視聴できる
- ◆イザベラ・キシユカ=ホフリク 2005年からポーランド映画芸術研究所職員。国際協力部門責任者、映画制作とプロジェクト開発責任者などを歴任、2017年10月から同研究所所長代行

2024 SAPPORO SNOW FESTIVAL **2024 SAPPORO SNOW FESTIVAL** **2024 SAPPORO SNOW FESTIVAL**

4年ぶりに開催された 第48回国際雪像コンクール (2024/2/3~7)

ポーランド・チーム
出場!

国際雪像コンクールには9か国が参加し、優勝に輝いたのはモンゴル・チームでした。ポーランドは残念ながら表彰台に上がることはできませんでしたが、日本でも評価と人気の高いボレスワヴィエツ陶器になみなみ入ったインクの中で月を釣ろうとしている「クレクス先生」を象った独創性あふれる雪像を制作して、見学に訪れる人々を大いに喜ばせました。



〈左から〉オスミツカ所長&チーム
E・ゲッペルト記念美術アカデミー
(ヴロツワフ市)の3博士たち
アンナ・コウォジェイチク、
ダニエラ・タゴフスカ、
プシエミスワフ・ピントル
〈右端〉当協会の安藤会長



『クレクス先生のふしぎな学校』のおかげで、クレクス先生はもう日本の子どもたちにもおなじみのキャラクターですね。ヤン・ブジェフファ作のこの児童書は、小椋彩さんの翻訳で2023年に小学館より出版されました。*

(ポーランド広報文化センター所長
ウルシュラ・オスミツカ)

雪像「童話の偉大なるハンター」の解説から
この雪像は、ポーランド童話のユニークな登場人物、クレクス先生を描いたもので、ティーポットの縁に座り、カップ（インクで満たされているのであろう）から笑顔の月を釣り上げて皆に見せています。このポットとカップは、ボレスワヴィエツにある最も有名なポーランド陶器メーカーの製品を基にしています。童話は最も魅力的で美しい世界共通の文化です。



北海道医療大学
ルブリン国立医科大学
交流協定を締結



交流協定締結式にて

北海道とポーランドとの間の協力関係の促進は重要といえます。そこで、私たち(シルヴィアと夫・佐藤)が北海道医療大学に勤務し始めた2016年に、ルブリン国立医科大学歯学部との関係構築を始めました。ルブリン国立医科大学は、ポーランドで最大の国立医科大学の1つに数えられます。医学、薬学、歯学、健康科学などの学部があり、それぞれ専門の医療従事者を育成しています。

この関係構築に関わった全ての人たちの尽力により、北海道医療大学歯学部とルブリン国立医科大学歯学部との間で学部間協定を結ぶことができました。しかし、残念ながら、その直後の新型コロナ感染拡大により共同プロジェクトや学術・学生交流は中断されてしまいました。

そして、2023年に入り、ようやく薬学部との連携拡大を皮切りに交流が再開されました。その結果、2024年3月、薬学部を通じた大学間の協定が結ばれました。今後、他学部も含めた大学レベルでの学生・教職員の連携・交流の拡大が期待されます。

(シルヴィア・オレーヤージュ&佐藤圭史)

* http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE109_p14BooksPanKleks.pdf

いていても眼光鋭く、当たり前のことを当たり前と、見過ごすことなく観察いたしました。当たり前ですが、当たり前でいられることは、なんと素晴らしい僥倖でないでしょうか。一個の爆弾も、大地震も、たちまち私たちの平安を壊してしまいます。死の迫る病者にとって、なによりも平安は大切なものです。

畑、蛙、ボウフラと我慈雨を待つ

ボウフラはやがて蚊になって人畜に害を与えます。それが、畑という食料生産の場と、「古池や蛙飛び込む…」の愛らしい蛙と「我」が一緒に並べられているところがこの句の目玉でした。私たちは「万物の霊長」として、利害で生き物の生命与奪を決めています。水が命の「我」もそれらと一緒に、大地への慈雨を希求しています。生物の命の平等感が主眼の句ですが、ユーモアがあります。

物忘れ梅つこ散ればほけが咲く

「ぼけ」は「木瓜」と「呆け」を掛けていますね。認知症は人生50年の時代には見られないものでした。長

寿が当たり前の時代です。ユーモアでもって、自分の老化と向き合えるように、日頃からの準備が必要です。「物忘れ」は高齢になれば、誰にでも見られることで、必ずしも認知症の前兆ではありませんけれど。

蟻うごき農夫もうごく日向かな

「蟻動き」と漢字を使つては絶対いけないところですか。「うごき」とすると小さな蟻の懸命な動きが、そして年食った農夫の広大な大地に取り付いて働いている姿がよく表われてきます。「日向」としたのは霜田さんのやさしさの現われです。「日向」はやわらかな言葉です。「日差し」はいかにも強い日光を思わせ、霜田さんはそれを避けたのでしょう。

霜田千代磨さんに、こんな句もありました。「うらめしや子持ち鯛(はたはた)口あけて」動物はほかの生き物の命を貰って生きてゆかねばなりません。それを「業」としてとらえるのは仏教になじんだ私たちに特徴的なことのように思います。

良い機会に恵まれました。深謝いたします。

(だけ・ふみひこ、現代俳句作家・詩人、本会会員)

北海道医療大学とルブリン国立医科大学の学術交流

2024年6月中旬、ルブリン国立医科大学との学術交流の一環としてマリア・ミエルニク=ブラシュチャク教授=写真右=が北海道医療大学(当別町、札幌市)を訪れました。同教授は小児歯科を専門としています。訪問時には当別とあいの里のキャンパスを訪れ、日本の歯科治療に関する現状を把握するとともに、ポーランドの小児歯科に関するセミナーを行いました。滞在中の休日には、支笏湖や積丹半島にも足を運び、かつてないほどの好天に恵まれたこともあり、北海道の自然の美しさに魅了されていました。

本年9月には、北海道医療大学歯学部 of 古市保志学部長がルブリンを訪問する予定です。また、心理科学部分野での協力も期待されており、今後の両大学間の関係発展が楽しみです。



(シルヴィア・オレーヤージュ、佐藤圭史
Sylwia Olejarz, Sato Keiji, 北海道医療大学)

【5月よりつづく】 《第112回例会》『Ainu | ひと』上映 ◆アンケートの感想より

<p>日英での報告で、130年の時をへて現代の人が英国を訪れた話を聴くことができ良かった。また、現代も平取町では、文化が守られているだけではなく、復活して、現代も生きて発信されているのはどうしてかを映画から知る事ができてとても良かった。(50代)</p>	<p>平取の春夏秋冬を通し、そこに累々と根づいて来たそれぞれのAinu ひとたちの生活、祈りが画面の中から感じられ、改めて文化や民族を継承していくことの大切さや難しさを理解させて頂くことが出来た作品だと思いました。より多くの人たちにこの作品を見てもらうことにより、アイヌ文化を理解する機会になるものと信じます。良い機会をありがとうございました。</p>
<p>ドキュメンタリーは、なかなかの力作。アイヌ文化の中核となる「アイヌ語」を伝えることが、いかに大切か、再認識しました。先住民の権利について国際的な連帯をもっと強めてほしい。(70代)</p>	<p>映画が終わった後、彼らの自然との共生、他者との共生という考えに共感と癒やしを感じました。美しかったです。祖先から受け継がれてきた自然(神)に対する敬いの心と深い知識をもって自らも自然の一部として生きていっしやる。アイヌ文化を次代に引き継ぐことは簡単ではありませんが、日本の重要な文化として引き継ぐことが必要だと思いました。しかしアイヌの方々に対する差別は過去のことではなく、現在進行形の問題です。それで言うと、4人の登場人物のなかでお若い方の経験に基づく発言が最も重要で、そのような経験をする事のない社会を創ることがアイヌも含めた私たち全員の責任だと考えます。(60代)</p>